

サモア語、タヒチ語、ハワイ語の動詞後置形態素 ina、hia、?iaの現れ方について

その他（別言語等） のタイトル	Occurrence of Post-Verbal Morphemes ina/hia/?ia in Samoan, Tahitian, and Hawaiian
著者	塩谷 亨
雑誌名	北海道言語文化研究
巻	17
ページ	127-140
発行年	2019-03-29
URL	http://hdl.handle.net/10258/00009996

サモア語、タヒチ語、ハワイ語の動詞後置形態素 *ina*、 *hia*、*'ia* の現れ方について*

塩谷 亨

Occurrence of Post-Verbal Morphemes *ina/hia/'ia* in Samoan, Tahitian, and Hawaiian

Toru SHIONOYA

要旨：ポリネシア諸語に属する同系言語であるサモア語の *ina*、タヒチ語の *hia*、ハワイ語の *'ia* は同様に動詞の後ろに付加される受動態の指標として分析されていたもので、非常に類似した環境で用いられる形態素であるが、その分類については、接辞とする分析或いは小辞とする分析との間で、言語間或いは同じ言語の記述内でも、差異や推移が見られる。本稿では、これらの三つの形態素について、強勢、生産性、他の動詞後置形態素との位置関係、の三点に着目して比較した上で、先行する動詞への依存度が高いものをより接辞的、低いものをより小辞的とする基準を設定し、三つの形態素についてより接辞的であるか小辞的であるかの考察を行った。

キーワード：ハワイ語 タヒチ語 サモア語 接辞 小辞 受動態

1. はじめに

1.1. 分析対象言語とデータ

本稿で扱うサモア語、タヒチ語、ハワイ語は起源を同じくする同系言語グループであるポリネシア諸語に属しており、更に、タヒチ語とハワイ語はその中でも東部ポリネシア諸語という同じ下位グループに属しており、より近い関係にある。これらの三言語は基本語順（述語が文頭で VSO）、動詞や名詞の前後に様々な文法的及び副詞的な働きを持つ接語や小辞が付加されて動詞句・名詞句を形成すること、概ね孤立語的であるが接辞も使われること等、文法の重要な原則が共通であり、単語（機能語及び内容語も）も同系のものが多いことから、ある特定の文法現象について三言語間で対照を行いやすい状況にある。本稿では三つのポリネシア諸語の形態素、サモア語の *ina*、タヒチ語の *hia*、ハワイ語の *'ia* の対照を行うが、これらの形態素を用いる事例についても、三言語で構造がよく対応しており、比較対照に適しているものである。

分析データについては、近年ネイティブスピーカーの減少から話し言葉データを入手する

のが困難なハワイ語に合わせるため専ら文字データを用いる。これらの三言語は、いずれも、ローマンアルファベットを利用した文字システムが 19 世紀に考案され、それ以降、聖書、法律、学校教材、小説、伝統文化の記録等の各種出版物、更には新聞の発行もなされ、文字言語が確立した言語であり豊富な文字言語データの蓄積がある。ジャンルとしては、伝統習慣、伝承伝説、歴史、ニュース、法律、物語、解説などできるだけ多様なデータを利用した。以下、それぞれの例文には出典（ページ数含む）を示す。

1.2. 動詞に後置されるいくつかの要素

三言語共通の特徴として、動詞の後ろには、修飾語（他の動詞が副詞的に用いられるもの）の他、様々な小辞(*particle*)や接語(*clitic*)が用いられる。ポリネシア諸語の機能語には小辞と接語の二種類があるが、本稿では、Bowden(2001:85)による *Taba* 語（ポリネシア諸語を含む大語族であるオーストロネシア諸語に属するインドネシアの言語）の分類基準の一部を利用して、強勢を持ち得る(*attracts primary stress*)ものを小辞、強勢を持ちえない(*never attracts stress*)ものを接語と分類する。強勢の規則については後述するが、本稿では、これらの三言語においては、短い 1 音節（短母音を含む音節）からなる機能語は強勢を持ち得ないため接語とみなされる、一方、2 音節以上の機能語又は長い音節（二重母音又は長母音を含む音節）からなる機能語は強勢を持ちえるため小辞とみなされる。

動詞の後ろに付加される要素には様々なものがあるが、三言語に共通の要素として、動詞の修飾語（大部分は他の動詞が副詞的に用いられているもの）、方向詞（空間的、時間的、及び抽象的な方向性を示す）、強調詞がある。サモア語の例でそれら三つを概観する。尚、例文の提示に際しては言語を区別するため、以降、サモア語、タヒチ語、ハワイ語をそれぞれ(S)、(T)、(H)のように表示する。

<	動詞句	>	<主語名詞句>
	動詞 修飾語 方向詞		
(1)(S)	'ua tafa tele mai ata ¹		
	<完了> はっきりする 大いに <接近>		明暗
	「(夜が明けて) 明暗がとてもはっきりしてきた」 Moyle (1981:171)		

<	動詞句	>	<主語名詞句>
(2)(S)	'ua toe vala'au mai fo'i le pusi		
	<完了> 再び 告げる <接近> <強調>		<定>ウナギ
	「ウナギは再びまた告げた」 Steubel and Herman (1987:33)		

例文(1)は動詞句 'ua tafa tele mai 「とてもはっきりしてきた」と主語の名詞句 ata 「明暗」の二つの句から成る。動詞句 'ua tafa tele mai 中の主たる動詞は tafa 「はっきりする」であり、その直後の修飾語 tele 「大いに」は動詞 tele 「大きい」が副詞的に前の動詞 tafa を修飾して

いるものである。更にその後ろに接近を表す方向詞 *mai* が来ている。例文(2)は動詞句 *'ua toe vala'au mai fo'i* 「再びまた告げた」と主語の名詞句 *le pusi* 「ウナギ」の二つの句から成る。動詞 *vala'au* の後ろに同じく接近を表す方向詞 *mai* が来ているが、更にその後ろに強調詞 *fo'i* が来ている。上記の例文が示すように、これら三つの要素の位置関係は＜動詞—修飾語—方向詞—強調詞＞となり、修飾語は動詞の直後、強調詞は動詞句の末尾に来る。この語順も三言語共通である。尚、上記の例に含まれている方向詞と強調詞はいずれも二音節以上からなり強勢を持ち得るので小辞とみなされる。

1.3. 動詞に後置されるサモア語の *ina*、タヒチ語の *hia*、ハワイ語の *'ia*

前節で述べたもの以外に、三言語共通で見られる動詞の後ろに用いられる形態素として、従来、受動態の指標として言及されていたサモア語の *ina* タヒチ語の *hia* ハワイ語の *'ia* がある²。

(3)(S) *na fa'alogoina e Fuaoletoelau le mea 'ua tupu*
＜過去＞ 聞く-＜受動＞ ＜行為者＞ *Fuaoletpelau* ＜定＞ こと ＜完了＞ 起こる
「起こったことが *Fuaoletoelau* によって聞かれた」 Henry (1980:37)

(4)(T) *ua hāmanihia tō mātou fare e te tamuta*
＜完了＞ 作る-＜受動＞ 我々の家 ＜行為者＞ ＜定＞ 大工
「我々の家は大工によって作られた。」 Lazard and Peltzer (2000:66)

(5)(H) *ua kau 'ia kēia mau kanawai e ke ali'i nui*
＜完了＞ 制定する ＜受動＞ この ＜複＞ 法律 ＜行為者＞ ＜定＞ 王
「王によってこれらの法律が制定された」 Adameck (1994:53)

例文(3)では *fa'alogo* 「聞く」に *ina* が、例文(4)では動詞 *hāmani* に *hia* が、例文(5)では動詞 *kau* 「制定する」に *'ia* がそれぞれ付されている。

Pratt (1911:50)はサモア語の *ina* の語義として、“a particle affixed to verbs to form the passive”と述べている。Davies (1851:102)もタヒチ語の *hia* の語義として“an affix to verbs, denoting the passive form, as *hinaaro*, to love, *hinaarohia*, loved”と述べている。同様に、Andrews (1854:121)はハワイ語の *'ia* の機能について動詞 *lawe* 「取る」の活用の説明の中で“*Laweia* is the passive of *lawe*. The termination *IA* is the sign of the passive, or forms the passive in all the conjugations.”と述べている。このようにサモア語の *ina* タヒチ語の *hia* ハワイ語の *'ia* の三つの形態素はいずれも、元々、動詞に付加されて受動態を表す指標とみなされていた。

しかしながら、その後、個別言語の研究や類型論の進歩に伴い、サモア語の *ina* の機能について見直されることになった。現在、サモア語は能格言語と見なされ、それに伴って、*ina* の機能も、受動態（受動態は対格言語であることが前提）の指標ではなく別の機能があると記述されている。例えば、Mosel and Hovdhaugen(1992:198 及び 747)は *ina* は受動態の文ではなく能格表示を示す動詞の文で用いられる能格化動詞接辞“*ergativising verbal suffix*”であり、

その機能としては、1) 非能格動詞に付加して能格動詞化する(“changing non-ergative verbs into ergative verbs”)、2) 行為が語用論的に突出した行為者を含意する(“the action implies a pragmatically salient agent”)場合に、元々能格動詞であるものにさらに付加され長形(long form)の能格動詞を形成する、の二つを挙げている。現在は、このような分析が一般的となっている。

この分析に従うと、前掲の例文(3) (例文(6)として再掲) の分析は以下の様に改訂される。

(6)(S) na fa'alogoina e Fuaoletoelau ø le mea 'ua tupu
 =(3) <過去> 聞く-<能格化> <能格> Fuaoletpelau <絶対><定> こと <完了> 起こる
 「Fuaoletoelau が起こったことを聞いた」 Henry (1980:37)

このように、従来、受動態の接辞とされていた *ina* は能格化接辞として、また、行為者格「~によって」を示す前置詞として分析されていた *e* はこの能格構文の主語 *Fuaoletoelau* に付加された能格の前置詞として分析される。更に、目的語 *le mea 'ua tupu* 「起こったこと」には絶対格の指標 \emptyset が付加されていると分析される。

1.4. 三つの形態素の扱いの差異と変遷

前節で概略した三つの形態素について、接辞(それ自身は一つの独立した語ではなく、語根に付加されて一つの語の一部を成す)であるか小辞(それ自身が一つの独立した語)であるかの区別について、言語間での扱いの差異、及び、同じ言語でも新旧の記述において扱い方の揺れや推移が見られる。

サモア語においては、旧来の記述である Pratt (1911:50)で *ina* は“a particle affixed to verbs to form the passive”と、小辞(particle)という言葉を用いているものの、affixed「接辞として付加される」と記述していること、また、Pratt (1911:38)に示された受動態の例文等においても *fa'atōina* 「呪われた」(*fa'atō* 「呪う」)のように<動詞+*ina*>を一語として書いていることから、*ina* は接辞とみなされていたと考えられる。最近の記述でも、前述の Mosel and Hovdhaugen(1992:198)のように *ina* は能格化動詞接辞“ergativising verbal suffix”として接辞として分析されている。このようにサモア語においては *ina* は一貫して接辞として扱われている。

タヒチ語においては、旧来の記述である Davies (1851:102)では、*hia* は“an affix to verbs, denoting the passive form, as *hinaaro*, to love, *hinaarohia*, loved”のように接辞と分析したうえで *hinaarohia* のように一語として表記している一方で、同じ文献の別の頁 Davies (1851:16)では“a verb passive is commonly known by the particle *hia* being added to it, as *hinaaro hia*, loved”のように、particle(小辞)と述べた上でその直後の例で *hinaaro hia* のように二語として表記していることから、同じ文献内で小辞か接辞かで記述に揺れが見られた。最近の記述である Académie tahitienne (1986:276)では、*hia* は“suffixe de passivation”と明確に接辞と述べており、現在の正書法でも、例えば、*tāpūhia* 「切られる」(*tāpū* 「切る」)のように分かち書きせずに

一語として表記される。このように、タヒチ語においては、旧来は接辞か小辞かその扱いに揺れがあったが、現在では接辞として扱われるようになっていく。

ハワイ語においては、旧来の記述である Andrews (1854:121)では前述のように動詞 lawe「取る」の活用の説明の中で“Laweia is the passive of lawe.”のように一語で書かれていることから接辞として分析していたと考えられ、実際に、古い文献では、動詞語根と‘ia は分ち書きされず一語として表記されていた。しかしながら、最近の記述である Elbert and Pukui (1979:83)では‘ia を particle(小辞)とした上で、“written as a separate entry because it too can separated from its base”のように明確に独立した語と述べている。上述の例(5)は 19 世紀に書かれたハワイの法律であり、本稿の例文の表記としては、現在の正書法に合わせて kau ‘ia と二語で表記しているが、実際には kauia(古い文献では声門閉鎖音を示す文字‘は省略される)のように一語として表記されていた。このように、ハワイ語においては、かつては接辞とみなされていた‘ia が現在では小辞とみなされるようになり、扱い方に変遷が見られる。ここまですら見られた三つの形態素の扱われ方の差異と変遷を表 1 としてまとめる。

分析	サモア語	タヒチ語	ハワイ語
旧来の記述	接辞	接辞・小辞	接辞
最近の記述	接辞	接辞	小辞
現在の正書法	動詞-ina で一語として表記	動詞-hia で一語として表記	動詞と‘ia は二語として分ち書きで表記

表 1 三つの形態素の扱われ方の差異と変遷

接辞と小辞の区分は形態統語論的な独立性の有無に基づくものであるが、実際には、形態統語論的な独立性は明確に線引きできるものではなく程度問題としてとらえなければいけない側面があるため、このような差異や推移が見られることは不思議ではない。しかしながら、かつて接辞と分析されていたものが小辞と分析されるようになったこと、同系で文法構造上の類似点も多い言語間で一方の言語で接辞と分析されているのに片方の言語では小辞と分析されていることは、興味深い事である。

1.5. 本稿の目的

本稿では、前節で述べたように、扱い方に差異や変遷が見られたサモア語の ina、タヒチ語の hia、ハワイ語の‘ia の三つの形態素について対照し、どのような違いがあるのか示すとともに、それぞれを接辞と小辞のいずれとみなすべきであるのか、あるいは、それぞれの接辞らしさ及び小辞らしさについて考察する。その際、強勢、生産性、他の動詞後置形態素との位置関係、の三点に着目する。尚、強勢についての比較においては、接辞と小辞以外のもう一つの可能性である接語としての分析の是非についても述べる。

接辞と小辞の分類には何らかの基準が必要である。前節でも述べたように、明確な二分法を適用することは難しく、程度問題としてとらえるべき問題である。接辞は語に付加され全

体として一つの語を形成するものであることから、接辞は先行する動詞への依存度が、小辞よりも、高いと考えられる。そこで、本稿では、先行する動詞への依存度がより高いものをより接辞らしいものとし、逆に、先行する動詞への依存度がより低いものをより小辞らしいものとして、これを指針として分類を試みる。

接辞的 小辞的
大 ← ----- 先行する動詞への依存度 ----- → 小

表 2 接辞的と小辞的 分類の指針

2. 三つの形態素の比較

2.1. 強勢(stress)

語の強勢についての規則は三言語共通であり、Mosel and Hovdhaugen (1992:28)、Académie tahitienne (1986:9)、Elbert and Pukui(1979:16)、いずれにおいても、短母音からなる二音節の場合、強勢は常に後ろから二番目の音節に起こる。一つの音節の構造は三言語共に(C)Vである。従って、上述の例文中のサモア語の *ina*、タヒチ語の *hia*、ハワイ語の *'ia* はいずれも二音節からなり、*ina* は[ína]、タヒチ語の *hia* は[hía]、ハワイ語の *'ia* は[?ía]のように、後から二番目の音節、すなわち、それぞれ母音 *i* を含む音節に強勢が来るという点で共通である³。強勢という点については、三つの形態素の間に差異は見られない。

強勢に関連して、これらの三つの形態素の分類について、二つの可能性が考えられる。第一は、これらの形態素は接辞であり前の動詞語根とともに一つの単語を形成している、すなわち、一つの単語の中の部分を成すものであり、その中で後ろから二番目の音節に強勢が置かれているという分析である。この分析によれば、例えば、例(3)でサモア語の *fa'alogo-ina* は一語であり、*ina* は接辞であり *fa'alogoina* という一つの単語の部分を成すものとみなされる。接辞であっても、二音節である *ina* では後ろから二番目の音節に強勢が置かれることには変わりはない。

第二は、これらの形態素は前の動詞とは独立した短い語であり、その短い語の中で後ろから二番目の音節に強勢が置かれているという分析である。この分析によれば、例えば、例(3)でサモア語の *fa'alogo-ina* は動詞 *fa'alogo* と小辞 *ina* という二語から成る句であるとみなされる。

いずれの分析でも、動詞の末尾に付加されているサモア語の *ina*、タヒチ語の *hia*、ハワイ語の *'ia* に強勢が置かれることは説明されるが、前者の分析は、これらの形態素を語の一部、すなわち、接辞とみなすものである。また、後者の分析はこれらの形態素を動詞とは別の短い独立した小辞とみなすものである。

本稿では 1.2 節で述べた様に強勢が置かれるものを小辞、強勢が置かれないものを接語とみなすため、小辞か接語かという区分のみに着目すれば、強勢が置かれるこれらの形態素は接語ではなく小辞とみなされることになる。

2.2. 生産性(productivity)

これら三つの形態素はいずれも生産的である。Mosel and Hovdhaugen (1992:198)、Lazard and Peltzer(2000:66)、Elbert and Pukui (1979:83)のいずれも、語彙的に特定の共起できない動詞が決まっている等の制限についての言及はない。

生産的であることは外来語動詞との共起によって裏付けられる。各言語の例を表3に示す。

言語	受動態	原形	語源(英語)	ソース
サモア語	lokaina 「ロックされる」	loka 「ロックする」	lock	Milner (1966:111)
タヒチ語	papetitohia 「洗礼を施される」	papetito 「洗礼を施す」	baptize	Saura and Millaud(2001:56)
ハワイ語	kila 'ia 「封印される」	kila 「封印する」	seal	Pukui and Elbert (1986:150)

表3 三つの形態素の外来語動詞との共起の例

このようにいずれも生産的でありその点において差異は見られない。生産性が高いという点では、接辞的とする分析も小辞的とする分析もどちらも可能と思われるが、特定の語に依存しないという点では、より小辞的と考えることが出来ると思われる。

2.3. 他の動詞後置形態素との位置関係

2.3.1. 強調詞(intensifier)との位置関係

1.2 節で、三つの言語共通で、動詞の後置要素の位置関係は<動詞—修飾語—方向詞—強調詞>となることを概観した。ここでは、一番外側の強調詞から、方向詞、修飾語の順に、サモア語の *ina* タヒチ語の *hia* ハワイ語の *'ia* との位置関係について比較する。これら三つの形態素と先行する動詞の間に他の要素が割り込むことが出来れば、先行する動詞への依存度はより低いものと考えられ、すなわち、より小辞的と考えることが出来る。先行研究 (Mosel and Hovdhaugen (1992)、Académie tahitienne (1986)、 Elbert and Pukui (1979)) では、サモア語の *ina* は動詞の直後、まれに修飾語や方向詞の後に、タヒチ語の *hia* とハワイ語の *'ia* は修飾語の後に現れるとされているが、以下、それぞれ比較しながら三言語間の差異を見ていく。

強調詞は動詞句の末尾に用いられ、意味を強める機能を持つ。「実に」、「もまた」のように具体的に日本語訳に反映させることができる場合もあるが、何を強調しているのか明確に把握しがたい場合も多い。三言語でよく用いられる同系の強調詞として、サモア語の *fo'i*、タヒチ語・ハワイ語の *ho'i* がある。

(7)(S) ua fa'atonuina fo'i le aumaga
 <完了> 命じる-<能格化> <強調> <定> 若者たち
 「若者たちに命じた」 Henry (1980:66)

(8)(T) *ia tu'uhia ho'i te ieie ota*
 ~ならば 植える-<受動> <強調> <定> *ieie ota*(植物名)
 「*ieie ota* が植えられるなら」 Manu-Tahi(1998:121)

(9)(H) *ua mahele 'ia ho'i ka pule-hai i na ano elua*
 <完了> 分ける <受動> <強調> <定> 祈り-奉献 ~に<複> 種類 2
 「奉献の祈りは二種類に分けられる」 Beckwith (2007: 57)

これらの強調詞は句末に用いられるものであり、当然、サモア語の *ina* タヒチ語の *hia* ハワイ語の *'ia* はこれらの強調詞よりも内側、すなわち、動詞の近くに置かれると予測されるが、実際の用例もその通りである。三つの言語の形態素 *ina/hia/'ia* について強調詞との位置関係について差異は見られなかった。

2.3.2. 方向詞(directional)との位置関係

方向詞は強調詞よりは内側、すなわち、動詞の近くに用いられるものである。良く用いられるものとして、接近の方向性を表す *mai*(三言語で同形)、離散の方向性を表す *atu*(サモア語とタヒチ語で同形)/*aku* (ハワイ語) がある。これらは文中の同じ決まった位置(修飾語と強調詞の間)に現れる。

(10) (S) *'ua tu'uina atu le tali*
 <完了>受ける-<能格化> <離散> <定> 答え
 「答えは受け入れられた」 Moyle(1981:56)

(11)(T) *ua itehia mai teie ofai*
 <完了> 見る-<受動> <接近> この 石
 「この石が見られた」 Manu-Tahi (2005:103)

(12)(H) *ua hai 'ia mai keia mo'olelo*
 <完了> 言う <受動> <接近> この 話
 「この話が語られた」 Malo (1987:156)

このように、サモア語では後述する一部の例外を除き方向詞が *ina* よりも外側、すなわち動詞から遠いところに現れていた。タヒチ語とハワイ語においては一貫して方向詞が *hia* や *'ia* よりも外側、すなわち動詞から遠いところに現れていた。従って、全体的な強い傾向として、サモア語の *ina* タヒチ語の *hia* ハワイ語の *'ia* は方向詞よりも動詞に近いところに現れる傾向が強いということが言える。

しかしながら、サモア語において、この全体的傾向から逸脱していると考えられる例外が、若干存在する。*ta'u*「告げる」は頻繁に方向詞と共に用いられる動詞であるが、多くの場合は、上述の全体的傾向に合致して、*ina* は方向詞よりも動詞に近いところに用いられる。

(13)(S) 'ua ta'uina atu loa 'i ai le tama'ita'i lenei
<完了> 告げる-<能格化> <離散> すぐ ~に <照応><定> 女性 この
「すぐにこの女性はその人に告げた」 Moyle(1981:82)

例(13)のように ina が方向詞よりも動詞に近いところに用いられる例が多くみられる一方で、頻度は落ちるものの、このような全体的な傾向から逸脱して例(14)のように、ina が方向詞の後ろに用いられる例外的な事例が若干ではあるが存在する。

(14)(S) 'ia 'e ta'u atuina 'iate a'u
<願望> あなた 告げる <離散>-<能格化> ~に 私
「あなたが私に告げるように」 Moyle(1981:56)

ta'u「告げる」はほとんどの場合、方向詞 mai か atu のいずれを伴って用いられることから、方向詞との結びつきが極めて強いと考えられる。例(14)のような事例は、<動詞+方向詞>、例(14)の場合には<ta'u atu>、で一つの動詞の塊のように捉えられているため、方向詞 atu の後ろに ina が付加されたと考えられる⁴。尚、例(14)を見てわかる通り、方向詞の後ろに ina が付加される場合には、方向詞と ina が一語として（方向詞 atu と ina を分ち書きせずに）表記される。

以上の様に、サモア語に若干の例外が見られたものの、三つの言語の形態素 ina/hia/'ia について方向詞との位置関係については概ね差異は見られなかったと言える。

2.3.3. 修飾語(modifier) (他の動詞の副詞的用法) との位置関係

動詞の後置修飾語は主に他の動詞が副詞的用法で用いられているものであるが、強調詞や方向詞よりも内側、動詞のすぐ後に用いられる。修飾語としては、様々な動詞が用いられる。良く見られるもので、三言語で対応する例を示しながら比較する。

最初の例は、「良い」という意味の動詞を副詞的用法で「良く、適切に」というような意味で前の動詞を修飾するものである。以下の例文で修飾語を太字で示す。

(15)(S) e ao ina tufatufaina **lelei** e tusa ai ma le aofai o sea
<未完了> ~すべき 配分する 適切に<未完了> による<照応> ~に <定> 量 ~の 株
「株式数に応じて適切に分配されるべきである」
Ministry of commerce, industry and labor (2006:343)

(16)(T) e aupuru-**maitai**-hia teie ta'ata,
<未来> 面倒を見る-良く-<受動> この 人
「この人は良く面倒を見られるだろう」 Manu-Tahi (2005:112)

(17)(H)Ina aole i manao **maikai** 'ia kekahi kanaka
もし <否定> <完了> 思う 良く <受動> ある 人

「もしある人が良く思われていなかったなら」 Adameck (1994:54)

サモア語では *ina* が修飾語よりも内側に来ているのに対し、タヒチ語とハワイ語では修飾語よりも外側に *hia* 及び *'ia* が来ている。ここで、サモア語とタヒチ語・ハワイ語の間に明確な差異が見られた。ここでタヒチ語の表記について興味深い事実がある。例(16)の表記を見てわかるように、タヒチ語の一般的な正書法では、<動詞+修飾語+*hia*>のような順番になった場合、それぞれをハイフンで結合して全体で明確に一語であることを示すように表記されている。これは、最近の記述において、タヒチ語の *hia* が接辞として分析されていることを反映している。

もう一つ良く見られる例は、「大きい」という意味の動詞を副詞的用法で「大いに、たくさん」のような意味で前の動詞を修飾するものである。

(18)(S) *ua tigaina tele le alii*

<完了> 苦しむ-<能格> 大いに<定> 領主

「領主は大いに苦しんだ」 Moyle (1981:86)

(19)(T) *ia maiti-rahi-hia te mau taata*

<願望> 選ぶ-たくさん-<受動> <定> <複> 人

「人々がたくさん選ばれるように」 Manu-Tahi (2005:126)

(20)(H) *he la i makemake nui 'ia e na kanaka.*

<不定> 日 <完了> 望む 大いに <受動> <行為者> <複> 人

「人々によっておおいに望まれた日だ。 Beckwith (2007: 165)

「良く」の場合と同様、サモア語では *ina* が修飾語よりも内側に来ているのに対し、タヒチ語とハワイ語ではサモア語とは異なり、修飾語よりも外側に *hia* 及び *'ia* が来ている。タヒチ語で三つの要素がハイフンにより結合されているのは上記の例(16)と同様である。

このように、サモア語では *ina* が修飾語よりも動詞に近いところに用いられるのに対し、それとは異なり、タヒチ語とハワイ語では *hia* や *'ia* が修飾語よりも外側に用いられるという点で、差異が見られた。

しかしながら、サモア語において、稀ではあるが、タヒチ語やハワイ語と同様に修飾語の後ろに *ina* が現れると考えられる例外が若干存在する。今回のデータにも以下のようなものが含まれていた。

(21)(S) *le fai leagaina o a'u i le lalolagi,*

<定> する 悪く-<能格化> <属格> 私 ~に <定> 天

「天で私を傷つけたこと」 Sio(1984:10)

例(21)は動詞句の先頭に定冠詞 *le* を付加することによって全体を名詞化（英語の動名詞「~すること」に類似した構造）した例文である。動詞部分に着目すると、*fai leagaina* のように、<*fai*「する」+*leaga*「悪く」-*ina* 能格化>という形で、「(誰かを)傷つける/害する」という意味を表している。例(14)で方向詞の後ろに *ina* が付された場合と同様に、ここでは、修飾語と *ina* が一語のように（修飾語と *ina* を分ち書きせずに）表記される。*fai* は「(何らかの行為を)する」という意味の動詞であり、*leaga* は「悪く」「悪い」という動詞の副詞用法）という意味があるが、ここでの意味は「何かの行為を悪く（下手に）する」ではなく「(誰かを)傷つける」であり、文字通りの意味からはやや逸脱しており、むしろ、*fai leaga* 全体で「(誰かを)傷つける」という一つの行為を表していると思われる。すなわち、*fai leaga* であたかも一つの動詞の塊のように捉えられているため、*ina* が *fai* ではなく *fai leaga* 全体に付加され、結果として、*fai* の後ろではなく、*leaga* の後ろに付加されたと考えられる⁵。

以上の様に、サモア語に若干の例外が見られたものの、三つの言語の形態素 *ina/hia/ia* について修飾語との位置関係については、サモア語の *ina* は修飾語よりも内側に現れ、一方、タヒチ語の *hia* とハワイ語の *ia* は修飾語よりも外側に現れるという点で、明確な差異が見られたと言える。タヒチ語の *hia* とハワイ語の *ia* については、動詞との間に修飾語が割り込みできることから、先行する動詞への依存度は、修飾語が割り込みしないサモア語の *ina* の場合よりも低く、従って、より小辞的であると考えられる。

サモア語においては上記の大きな傾向に逸脱する若干の例外が見られたが、これらの例外については、方向詞或いは修飾語がそれに先行する動詞と意味的に密に結びついて、全体で一つの意味を表し、全体としてあたかも一つの動詞の様にふるまっている場合であると考えられ、*idiomatic* な例外とみなすことが可能と思われる。

3. まとめ

前節の結果は以下の表 4 にまとめられる。

	サモア語	タヒチ語	ハワイ語
強勢(stress)	✓	✓	✓
生産性(productivity)	✓	✓	✓
強調詞(intensifier) との位置関係	Verb __ Intensifier		
方向詞(directional) との位置関係	Verb __ Directional		
修飾語(modifier) との位置関係	Verb __ Modifier	Verb Modifier __	

表 4 三つの形態素の対照まとめ

このように、全体としては、共通点が多いといえる。強勢を担うことができる点、生産的である点、動詞に強調詞や方向詞が付加される場合にはその強調詞や方向詞より

も内側（動詞の近くに）現れること、において、三つの形態素には差異が見られなかったが、動詞に修飾語が付加される場合においては、サモア語の *ina* が修飾語より内側に現れるのに対し、タヒチ語の *hia* とハワイ語の *'ia* はいずれも外側と、異なっていた。1.1 節で述べた様にタヒチ語はサモア語よりもハワイ語に系統的に近い言語であり、このタヒチ語とハワイ語の類似性はそれを反映していると思われる。

1.3 節で、これらの三つの形態素が接辞であるのか小辞であるのかの分類についての差異と推移が見られることについて述べた。表 3 の結果をもとに、この問題について考察する。既に述べたように、接辞と小辞の区別については、明確な二分法は難しく、程度問題としてとらえるべきものであり、本稿では、先行する動詞への依存度がより低いものを小辞的、より依存度が高いものが接辞的であると考える。

強勢と生産性についてはいずれも先行する動詞への依存度の低さを示すものであるが、三言語の三つの形態素間に差異がない。一方、方向詞との位置関係については、より動詞に近い位置に現れているということは動詞への依存度の高さを示すものであるが、これも三言語の三つの形態素間に差異がない。唯一、明確な差異が見られたのは、修飾語との位置関係である。サモア語の *ina* は修飾語よりも内側（動詞に近い位置）に現れている点で、動詞への依存度が高いと考えられる、一方、タヒチ語の *hia* とハワイ語の *'ia* は修飾語よりも外側（動詞から遠い位置）に現れている点で依存度が低いと考えられる。

以上をまとめると、これらの三つの形態素の中で比較した結果、サモア語の *ina* は全体的な強い傾向として、動詞の直後に来る傾向があると言え、他の要素が割って入らないことから先行する動詞への依存度は高く、より接辞的であると考えられる。一方、タヒチ語 *hia* とハワイ語 *'ia* は動詞と *hia/'ia* の間に修飾語が割って入ることができると、より依存度は低く、従って、より小辞的であると言える。



表 4 接辞的・小辞的 三つの形態素の比較

1.3 節で述べた様に、最近の記述では、タヒチ語 *hia* は接辞、ハワイ語の *'ia* は小辞として、異なる分類がなされているが、今回の比較の結果は、両者の独立性（先行する動詞への依存度）については差異が見られず、その意味では、異なる扱いをすべき積極的根拠はないということを示している。

謝辞

* 本研究は日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C) 25370455「ポリネシア諸語における様々な小辞の機能・用法に見られる差異について」の一環である。執筆に際して、査読者から有益なコメントをいただいた。この場を借りて謝金を表したい。

注

- ¹ 今回取り上げる三つの言語の正書法はローマンアルファベットを用いる。基本的にローマ字読みであるが、母音の前に見られる記号 ‘ は正門閉鎖音[ʔ]を表す。また、サモア語において用いられる g は閉鎖音ではなく鼻音[ŋ]を表す。
- ² サモア語の ina と良く似た用いられ方をする形態素 a というものもあるが、他の二言語の形態素と対応しない点があるため、今回は比較の対象から除外した。
- ³ 尚、強勢は動詞本体部分、例えば fa‘alogo の部分にも置かれる。fa‘alogo は fa‘a と logo の二つの塊として強勢が置かれ、それぞれ後ろから二番目の音節に強勢が来て、[fáʔa]、[lóŋo]となる。
- ⁴ 査読者から、英語の into や onto と同様に atuina が複合的な要素をなし、一つのまとまりとして動詞の直後に付加されていると考えることが出来るという分析の可能性の示唆があった。そのような分析も、サモア語において、ina は動詞の直後に付加されるという傾向性と整合するものである。
- ⁵ 実際、サモア語の動詞 fai 「する」は後の様々な修飾要素が付加されて、一つの動詞のようにまとまった意味を表す事例が非常に多い。例えば、fai 「する」+ fe‘au 「用事」で fai fe‘au 「(誰かに)仕える」、fai 「する」+ ‘āiga 「家族」で fai‘āiga 「家族として生活する」(いずれの例も Milner (1966)より)等である。

参考文献

- Académie tahitienne. (1986) *Grammaire de la langue tahitienne*. Papeete : Académie tahitienne.
- Adameck, Ted. (1994) *Hawaiian Laws 1841-1842*. Green Valley : Ted Adameck.
- Andrews, Lorrin. (1854) *Grammar of the Hawaiian Language*. Honolulu: The Mission Press.
- Beckwith, Martha W. (2007) *Kepelino's Traditions of Hawaii*, revised edition. Honolulu: Bishop Museum Press.
- Bowden, John. (2001). *Taba: Description of a South Halmahera Language*. (Pacific Linguistics, 521.) Canberra: Australian National University.
- Davies, John. (1851) *A Tahitian and English Dictionary*. Reprinted version. New York: AMS Pr.
- Elbert, Samuel H. and Mary K. Pukui. (1979). *Hawaiian Grammar*. Honolulu: University of Hawai‘i Press.
- Henry, Fred. (1980) *Talafaasolopito o Samoa*, Apia: Commercial Printers.
- Lazard, Gilbert and Louise Peltzer. (2000) *Structure de la langue tahitienne*. Paris: Peeters.
- Malo, Davida. 1987. *Ka Moololo Hawaii*. Honolulu : The Folk Press.
- Manu-Tahi, Charles Teriiteuanua. (1998) *Te parau o Papenoo, e peho no Tahiti*. Papeete: Les Éditions Veia Rai.
- Manu-Tahi, Charles Teriiteuanua. (2005) *Te parau o te mau vāhi faufaa o te mau tupuna i Moorea*. Papeete: Les Éditions Veia Rai.
- Milner, George B. (1966) *Samoan Dictionary*. London: Oxford University Press.
- Ministry of commerce, industry and labor. (2006) *The Companies Amendment Act 2006* (Samoan version). (downloaded from <https://www.businessregistries.gov.ws/companies/legislation/> at 2018/12/30.)
- Mookini, Esther T. (1985) *O na holoholona wawae eha o Ka Lama Hawaii*. Honolulu: Bamboo Ridge Press.
- Mosel, Ulrike and Even Hovdhaugen. (1992) *Samoan Reference Grammar*. Oslo: Scandinavian University Press.
- Moyle, Richard. (1981) *Fagogo*. Auckland: Auckland University Press.
- Pratt, George. (1911) *Pratt's Grammar & Dictionary of the Samoan Language*, 4th. edition. Malua: Malua Printing

Press.

Pukui, Mary K. and Samuel H. Elbert. (1986). *Hawaiian Dictionary*. Honolulu: University of Hawai'i Press.

Saura, Bruno and Hiriata Millaud, (2001) *La lignée royale des Tama-toa de Ra'iatea*. Papeete : Ministère de la culture de Polynésie française,

Sio, Gatoloaifaana P. S. (1984) *Tapasā o Folauga a Aso Afā*. Apia: USP Center.

Steubel, C and Bro. Herman. (1987) *Tala o le Vavau*. Auckland: Polynesian Press.

Sylvain, Teva and Valérie Gobrait. (2008) *19 fables de La Fontaine en tahitien*. Papeete : Pacific Promotion Tahiti.

執筆者紹介

氏名 : 塩谷 亨

所属 : 室蘭工業大学ひと文化系領域

Email : shionoya@mmm.muroran-it.ac.jp